The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	文化コミュニケーションの観点から見た日朝外交摩擦：「征韓」と「文化摩擦」を中心として
Author(s)	張, 竜傑
Citation	年報人間科学. 1997, 18, p. 99-116
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10355
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

文化コミュニケーションの観点から見た日朝外交摩擦

――「征韓」と「文化摩擦」を中心として――

張　竜傑

〈要旨〉

明治元年から始まった日朝外交摩擦は「皇」と「王」の解釈をめぐっての政治イデオロギー的な葛藤か、日本の途方もない征服の野心か、対馬藩主の経済欲による欺きであるとするような歴史学者の政治的、経済的解釈が中心となっている。だが、そのような歴史学者の業績を認めながらも、文化コミュニケーションの観点から考え始めると、両国の摩擦は単なる政治的、経済的な論理だけでは説明しにくい矛盾に直面することになる。そこで両国の外交摩擦を「文化の否定性」、自己中心主義的な他者理解、アジアヒエラルキーシステムへの認識のずれ、両国の西洋観のずれ、両国の伝統と変革に対する認識の差異など、文化的、社会的コンテクストの摩擦として捉えることができるだろう。

キーワード

征韓、文化コミュニケーション、文化摩擦、アジアヒエラルキーシステム、鎖国と開国

1. はじめに

青木保は『文化の否定性』のなかで「文化は人間のアイデンティティの核心であると同時に現代の世界の難問が多く文化そのものの性質に発することも明らかな事実である」[1]と述べながら、現代国際社会の中で様々なコミュニケーションの障害ーたとえば戦争、紛争、摩擦などーの要因は文化そのものにあることを主張するのである。そして「政治・経済それに歴史上の難問がこれらの紛争の根源にあることは事実としても、解決を困難にしているのは、そこに民族・言語・宗教などの文化的要因が分かちがたく存在するからである」[2]と文化がいかに現代の国際社会においてやっかいなものになったかを言うのである。

国家と国家との間に何か問題が起こった場合、従来はその原因を政治や経済やイデオロギーなどに求める事が多く、文化については考えられることが少なかった。

しかしながら、国家とか、民族が違うということは単なる人種差別のような生物学的な問題ではなく、文化の違い、異文化の没理解、自文化中心の他者認識などによって相手の民族を抹殺することは過去にもあったし、現在も戦争の場を借りて激しい闘争が行われている。

これは文化が人間にとって必ずしも有益な物ばかりではなく、人間の社会の中で様々な問題を引き起こす否定的な意味も持つようになったともいえるだろう。だからこそ、人間の社会で起こる様々なコミュニケーションの不調和理解するためにも政治、経済的な眼鏡を外して文化を直視するべきなのである。

ここで視線を明治初期の日本と朝鮮との関係に向けてみよう。明治維新以後新たな近代国家を作り出すためにもがいていた日本と中国以外の新たな巨大西洋文明の圧迫から自分を守るために強固な王権強化と西洋文明を野蛮な文明として意味づけ、それを絶対に受け入れてはいけないという絶対的な鎖国政策を行っていた朝鮮との摩擦は単なる政治的な摩擦よりは両国の持っている社会、文化的コンテクストから考えた場合その背後にある文化の問題を無視できないということは当然だとも言える。つまり、近代初期の両国関係の悪化ともいえる征韓の原因は両国における文化の摩擦という文化の否定的な結果だという視点も必要であろう。このような考え方を持って征韓の原因ともいえる両国の文化摩擦の現状を明らかにするつもりである。

2. 「天皇」と「王」における「アジア観」の対立

「征韓論」という政治事件を触発した明治初期の日本の明治政府と朝鮮政府との外交摩擦ー朝鮮政府が日本の新たな国交樹立の要求に対して拒否したことーは日本の明治政府が従来の朝鮮との外交関係を改めるために朝鮮に送った国書[3]の中に「皇」という字句があったことから始まったのである。当時朝鮮は中国に対して事大の礼を

守っていたから、朝鮮は日本に対してその字の削除、修正を要求し、国書を受け取ることを拒否したのである。

ところが、それをめぐっての解釈は歴史学者によって様々に行われてきたが、それは「尊皇征韓」の思想に基づいて朝鮮を日本の「臣隷」とすることか[4]、対馬島主宗家と東莱府任官の有無通じ合う結託及び当時日本の政治体制が変化による両国間の認識の対立か[5]、対馬藩主の経済欲による欺き及び「皇」と「王」の解釈をめぐっての政治イデオロギー的な葛藤[6]であるとするような解釈である。

歴史的に—主に江戸時代に限って—日本と朝鮮との関係と、アジア・ヒエラルキー的な関係を考えてみると「皇」の問題は常に敏感で大事な問題には間違いない。なぜかといえば、征韓という背景がすでに存在していたとしても朝鮮が日本の国書に書いてある「皇」に対して意識せずその国書を受け取ったとすれば、両国関係の事情は変わったかもしれない。すなわち、朝鮮が日本の天皇をアジアヒエラルキーシステム—いわゆる中国中心のアジア普遍主義ともいえるだろうが—という認識から意味づけるのではなく、天皇を中国の皇帝とは別の日本の独自の文化システム—文化相対主義的な立場—として意味づけることができたとすれば、なおさら、近代初期のアジアの事情も変わったかもしれない。

しかしながら当時の朝鮮の立場から見れば、「皇」という文字が使われた日本側の国書を受け取ることができないのは当然のことである。その理由として、多くは朝鮮が当時の中国（清）に対して事大の礼を守っているからであると論じられる傾向が多い。勿論それも間違っていると言えないが、なぜ朝鮮と日本はそれが皮相的であれ平等の関係を堅く守っていたのかということにも注目しなければならないだろう。すなわち、このことは、朝鮮の歴史的な悲劇—清との戦争で清に負けた敗北者の運命だといっても良いだろうが—ともいえるだろうが、一方では事大の外交を堅く守らなければならない立場と、もう一方では平等の外交を守りたいという当時のアジア国際関係のなかで置かれていた朝鮮の両義的な立場を知らせてくれるのである。

さらに、そのような立場とは全然無関係な当時の日本の外交関係の自由さも考えなければならないだろう。つまり、アジア・ヒエラルキー的なシステムの中に含まれないままにアジアとの関係を維持してきた日本の開かれた立場は、近代において朝鮮よりはるかに有利な立場にあった。言い換えれば、日本は国際関係の中で束縛されずに自分の意志を持って自主的な外交関係を行うことが出来たのである。それは朝鮮との大きな違いであり、アジアを認識するアジア観の隔たりとも言える。これこそ単に政治・経済的には説明しにくい文化の問題になるだろう。

朝鮮は中国に対して事大の礼を守っても日本に対しては歴史的に平等の関係にあったからそれが壊されることを恐れたのである。勿論その一方では中国に対する礼儀として日本が「皇」を使うことに反対したこともあるだろう。けれども、当時の朝鮮と清との関係は、ただの事大関係というよりはもっと複雑なものであったのである。

もともと、朝鮮にとって事大の礼—これは支配と被支配という関

係とは違って朝鮮の独自の政治、文化、外交などを認めるという一種の形式的な礼の関係であるがーの根本は明との関係にあったのである。明から様々な文明ー特に支配理念であった儒教ーを受け入れたし、豊臣秀吉が朝鮮を侵略したときは明が援軍を送って滅びる寸前の朝鮮を救ってくれた恩人である。だからこそ、清に対して事大外交を行っているとしても理念的には常に明が朝鮮にとって大きな意味を保ち続けていたのである。清との関係は明の理念的な関係とは違い経済的・文化的・軍事的な利益を得るための現実的な外交だったのである。[7] 特に、清の場合は朝鮮の初期から夷族として扱われた「女真族」ー朝鮮初期には国境を越えてくる彼らに対して軍事的な処置をとったり、帰化させて生活基盤を与えたりしたことがあるーであったので、[8] 軍事的には敗北して事大外交をしているが、理念的には屈服したとは考えられてはいなかっただろう。

それはともあれ、朝鮮はアジアの国際関係の中で、中国と日本との関係を一方では事大の外交を守るべきとしてとらえ、もう一方では平等の外交を守ってほしいという両義的な意味を持っていたのである。だからこそ、朝鮮が「皇」の文字に対して敏感に対応したのは中国への忠誠心よりは日本との平等関係を守ろうとする当時の朝鮮の外交矛盾を露呈したことになるだろう。いいかえれば、朝鮮は長く守ってきた日本との平等関係が変わる可能性を恐れたのでる。

ところで、日朝両国におけるこのような地位名称をめぐっての葛藤は近代に入ってから始まったわけではない。すでに、江戸時代にもその「王」と「大将軍」の名称をめぐっての神経戦は激しかったのである。つまり相手の国が自分をどのように称してくれるか、ということは、自分が相手とどのような関係にあるのかということを表すため、地位名称に対する考え方は想像を絶するものがあったわけである。

当時、アジアの中で中国だけが唯一「皇帝」という名称を使い他の国は「王」という名称を使うことによってアジア的ヒエラルキー構造を維持してきたわけである。しかしながら前述したように日本はただ朝鮮との外交関係を維持することによって断絶だけは避けていたが、実質的にその中に含まれておらずー室町時代には足利が一四〇三年明皇帝から正式に日本国王として冊封を受けるが、豊臣秀吉の朝鮮侵略以後、江戸時代には中国との関係が断絶されるー、独自の政治システムを持っていた。地位名称が親族名称と同様にその政治システムを反映しているとするならば、地位名称も中国との関係に沿って造る必要もなく、日朝両国との間に名称のずれがあることは当然である。しかし、両国が現実的に外交関係を結んだとき、それは実質的な問題ー特にお互いに平等という相互認識の下ではーとして表れるのである。どれほど両国の間で地位名称の問題が大きく、敏感であったかは、朝鮮国が国書に「日本国大君殿下」と改めることを認めたとき、家光が大満足を見せる光景からも十分察することが出来る。

「……信使進見の明日、三家御参りの時に、此事を仰出されしかば、井伊掃部守直孝、朝鮮の國王、大君と仰ぎ奉り侯事、我国

においていまだ其例を承らずと賀し申ければ、御前伺侯の人々、掃部頭申ノ如くに候と、皆一同に賀し申さる。……」[9]

このようにして江戸時代において国書の称号は3代将軍の時以来、「日本国大君」を使っていたが、[10] 新井白石は「日本国王」の称号に変更しようとした。しかし、雨森、松浦の反対と朝鮮側も「大君」の称号の使用を望んでいたこと、また国書の偽造の事件もあったため、再び「日本国大君」とい称号を使うことになったのである。新井白石はこれについて『大君』の称号は中国の天子の異称であるから日本にとっては「天皇」に当たるものであり、朝鮮にとっては「大君」は王子の嫡子を示す臣下になるため朝鮮国から蔑視される」[11] と考えたのである。もし、「大君」の称号が「天皇」を意味することになると、それは幕府の権力正当性を否定することになり、天皇の政治的な権力を認めることになる。そして朝鮮側に「大君」として王子の嫡子だと思いこまれたら、それは国家の威信にかかわることになる。つまり新井は地位名称を通してアジアのヒエラルキー的な構造を考えてそれに称号を当てはめようと努力したのである。彼は天皇と中国の皇帝とを同レベルに位置づけ、その下に朝鮮の王と幕府の将軍とを位置づける考えを持っていたのである。

しかし、朝鮮の場合は、「天皇」を中国の天子と同様に考えたこともないし、幕府の実質的な権力者として考えることもなかった。しかし、朝鮮は「天皇」の存在に対して非常に興味を持っていたのである。

「そして天皇は、みずからその国の帝となり、みずから正朔（暦法）をなして万古不易にわたる。これが倭皇の姓字が世に聞こえない所以であり、あるいは王氏と称し、あるいは源氏と称する。かれのその君たるの法は、ただ香を焚いて天に礼し、そして、みずから天より降った神人であるといい、摂捉（天神の名）が起こる歳には無為にして化するとおのれを擬するもの、すなわち、はじめから姓氏の有無は問題ではない。（中略）名があり姓がないのは、仏の如きものである。」[12]

朝鮮において「天皇」とは理解不能いわゆる翻訳不可能な称号であろう。崔吉城は天皇と王との比較研究において次のように要約している。

「ひとつは、韓国の世俗性が強い王と日本の宗教的神聖性が強調される天皇は両国の社会構造の際から来ることでお互いに違いを見せている。ひとつは、韓国では政教分離政策に鈍感なのでその政策については日本をモデルにしてもいい。」[13]

これを見ると朝鮮時代における王と日本の天皇とは全然違い、王中心のシステムを持った朝鮮側としては天皇を深く理解することが出来ないのは当然であろう。だからこそ、彼らの目には天皇が不思議に見えたし、宗教的に見えたのである。そして韓国では政教分離

政策が自明であるために政治と宗教との関係について韓国人自身はかえって無関心であると言える。特に朝鮮の王朝は世俗性が強いので天皇への理解に無理があっただろう。

このように政治権力が強い朝鮮は宗教的で、権威中心の日本の天皇制についてはそれほど深い知識を持たなかったし、迷いの末、江戸幕府の将軍が強力な権力を持っているものとしてとらえたかもしれない。しかし、秀吉が政権を握ったとき、朝鮮通信使の副使である金誠一は「倭皇＝天皇が国政にあずからないとしても関白は入臣にすぎずとして朝鮮国王は通信すべきではないとし、また関白は国王でもなく、相君＝太政大臣であるとする」[14]と天皇が国王であることを主張した。朝鮮は日本の二元的な権力構造に迷っているといわざるをえない。自分たちのように最高権力者が明白に決まっていてすべてがその権力者によって国家が動くという政治システムに慣れた官僚が当惑することは当然であろう。これほど朝鮮は日本の権力者が誰かに大きな関心を注いできたし、両国が常に平等の関係にあるべきだという基本的な認識の下で自分と同様の最高権力者と通信しなければならないという意識が強かったのである。[15] 勿論それは国家と国家とのヒエラルキー的な問題が内在しているからであろう。それに比べて日本の場合、朝鮮との外交関係は朝鮮よりむずかしくない。なぜかといえば、朝鮮の王が朝鮮の絶対的な権力者であることが明々白々であるからひたすら王と通信することはむしろ自分の地位を上昇させるいい機会になることも有り得るからだ。

朝鮮時代から両国間での問題は天皇であったし、悩みの種であった。自分の後ろに中国の皇帝があったからこそ、朝鮮の悩みはさらに大きかったであろう。すなわち、もし、朝鮮王が日本の関白と通信するならば、関白は天皇の臣下であるから、朝鮮王も関白と同様に臣下になるのである。これはアジア・ヒエラルキーを無視することであり、朝鮮にとって羞恥の外交となるのである。そうなると日本と中国との対等な関係を朝鮮が自ら認めることになり、日本の地位は上昇し、朝鮮は下になるのは明らかであろう。もし、日本と中国との関係がはっきりしていたら朝鮮の悩みもないかもしれない。しかし、日本と中国と間には外交関係はなく、ただ朝鮮との外交関係を通して、中国とは見え隠れする糸が日中を結んでいるだけである。そのような曖昧なアジア外交関係であるからこそ、朝鮮の立場は常に厳しかったと思われる。地位名称を勝手に使えない国とそのようなヒエラルキーシステムから離れていて自由に地位名称を創って使える国との立場は全く違うのが当然のことであろう。朝鮮は中国中心の普遍的な枠組みの中にありながら、日本との相対的で、平等な関係を維持してきた両義的な立場が近代になってその尾を引くのである。

このように天皇に対して非常に敏感であった朝鮮にとって今まで国書の中にあり得なかった「皇」の文字が入っていることは、いうまでもなく戸惑いを感じさせショックであっただろう。それは必ず抗議しなければならない外交的な問題であったのである。これは従来の平等という関係を守ってほしいという願望であったからである。

ところが、朝鮮とは違って、日本の立場としては外交文書である「国書」に天皇を表記しなければならないのである。天皇というのは日本の歴史の根本であり、特に天皇を背負って明治維新という革命を起こして江戸幕府を倒して新たに日本の政府を作り出した新しい日本の若手政治エリート達にとって、天皇の存在は重要であり、日本国家の代表者であるから、彼らが天皇という文字を国書に使うことは当然であろう。なぜかというと、日本は先述したように中国中心のアジア・ヒエラルキーシステムから遠ざかっていたし、新たに現れた西洋の国々とも国家関係を行っているし、「諸外国も我が新政府を承認し各国公使謁見国書を奉呈」[16]するように天皇は日本国家の代表者であり、明治新政府の象徴であり、特に、「王政御一新」を朝鮮側に通告するための国書であるから「天皇」という文字を使うことは当然である。そしてこれまでに政権を握っていた江戸幕府を倒したので、江戸幕府の地位名称とか印章を旧例通りに守ることは明治政府にとってあり得ないことは言うまでもないだろう。もちろん、「王政御一新」の通告は明治政府が直接行ったことではなく、従来の通りに対馬藩の宗家がその役割を果たしたのである。しかしながら、このように旧例を一方では守っているにも関わらず、「書辞、印章」が旧例とは違っていたため朝鮮側が書類を受け取ることができないのは言うまでもない。つまり、朝鮮は新政府を認めるわけにはいかなかったのであろう。

要するに、両国の外交関係が両国だけで行われるのではなく、必ずしもその裏には清という中国の存在が障害物となっているのである。

しかし日本とっては中国とは事大の礼を守るべき国ではないから常に平等意識を持つことができるし、それによって朝鮮を自分の臣下の国としてとらえることも可能である。実際に日本は、「朝鮮は支那に服従し其正朔（せいさく）節度丈（だ）けは受居侯事に御坐侯。就ては先（まず）支那え皇使を被レ遣、通信条約等の手順相整（あいととのえ）、其帰途朝鮮王京に迫り皇国支那と比肩同等の格に相定り侯上は、朝鮮は無論に一等を下し候礼典を用候て、彼方にて異存可二申立一筋有レ之間敷…（後略）」[17]と思っていたのである。すなわち、朝鮮と清との関係がいかなるものであろうかを察した上で、朝鮮の宗主国である清との関係を平等な外交関係を結べば、朝鮮も日本との新たな外交関係を結ぶことに間違いないと考えていたのである。それで日本の明治政府は清と外交条約を締結するのである。

朝鮮は、日本と清との修好条約締結のことに関して高宗九年（一八七二年）清から帰ってきた使臣から聞いて、特に、「倭はすでに中国と臣服の関係ではない国で倭人は称臣しないようである」[18]という報告を受けて、すごくあわてたに違いない。これは朝鮮は常に日本も中国と臣服の関係にあったと了解していたからである。だからこそ日本が「皇」という名称を使うことについてもっとも戸惑いを感じたわけであろう。

しかし、日本も朝鮮と清との関係がいかなる関係であったかについては子細に知っていなかったと考えられる。まるで江戸時代にお

ける江戸幕府と藩との関係として捉えていたのである。[19] それだけではなく、江戸時代における朝鮮通信使のことも朝鮮が江戸幕府に対して藩属の礼を行ったと理解していたのである。そのような論理から将軍が天皇に臣服の礼をしているから朝鮮もその礼を守るべきだと主張するのである。[20]

このように日本は「自文化中心主義」的相対主義をもって朝鮮を認識しているし、朝鮮の場合は常に「自文化中心主義」的普遍主義をもって他者を認識しているのである。[21] ここでの相対主義と普遍主義というのは、日本は中国中心主義の東アジアを独自の文化と考え、そこに個別性をして見ているのに対して、朝鮮の場合は中国を中心とするヒエラルキカルな統合性を見ているということである。日本は独自の文化を意識しているため朝鮮を見るときは自分よりも下に位置付けるというヒエラルヒー意識が強く働く。一方、朝鮮は日本を常にアジア普遍主義の中で位置付けようとしているので、このような日本の態度に異和感を感じるのである。この両国の中国を中心とするアジアシステムに関する認識の食い違いによって天皇と王との対立という形で外交葛藤が起こったと言わざるを得ないだろう。朝鮮側は自己中心的に考えてできるだけアジア・ヒエラルキー構造の中に日本を位置付けようと努力するのである。それは徳川時代からのいわゆる平等主義であろう。日本の場合は「天皇」を国家イデオロギーとして創り出した以上、国家の代表は「天皇」になる。イデオロギーとしての「天皇」は国家最高権力者ではなく、宗教的な権威と権力を持つ国家元帥である。[22] このような「天皇」は国家の中心というだけではなく、諸外国に対して日本のアイデンティティを体現するものにほかならず、外交関係にはとりわけ重要であった。従って、朝鮮の思い通りにアジア・ヒエラルキー構造の中に組み込まれるわけにはいかないのである。

以上のように明治初期の征韓論の原因ともいえる日本と朝鮮との外交摩擦は両国が自分を取りまいているアジアのヒエラルキーシステムをどのように認識するか、というアジア観への認識の差異とその差異を認めず自己中心的に相手を意味づけることによって始まったと言わざるを得ないのである。

朝鮮は常に自分を中国中心のアジアヒエラルキーシステムの中に閉じこめたまま、明治維新以後急激に代わった日本の政治システムを認めることができなかったのである。だから、天皇中心の日本の権力構造を否定する一方で、日本を自分のアジア観のなかに入れ込んで意味づけようとしたのである。

日本は天皇が新たな国家の最高統治者であるからそれを国書の中に書き入れることは当然であるし、中国中心のアジアシステムのなかに入ってないから、中国とは対等な立場であるという認識が強かった。そのため、そのような認識から朝鮮を意味づけようとしたのである。しかしながら、明治政府のエリートが行った外交は征韓をするための政治的な陰謀としても考えられるだろうが、少なくとも、彼らは近世における江戸幕府と朝鮮との外交関係の曖昧さ—対馬藩中心の外交関係—と幕府の藩中心の封建主義的なシステムから考えると江戸幕府と朝鮮との外交の旧例に関して知らなかったのであろ

う。なぜならば、朝鮮との新たな外交関係が躓いたとき明治政府は朝鮮と清との関係、朝鮮と江戸幕府との関係、朝鮮通信使の役割などに関して情報を収集していたことと、朝鮮と中国との関係が幕府と藩との関係のように認識していたことからも明確にわかるだろう。

3. 朝鮮における政治変動と鎖国

十九世紀世界は新たな出会いを繰り広げながら急激に変化しているにも関わらず朝鮮は常にその変化から遠ざかっていた。隣の国である日本も黒船以降明治維新が起こり開国を試行して積極的に西洋と関わっていくが、朝鮮は強固な鎖国政策を貫きながら西洋のノックに対して断固応じなかったのである。[23]

このような両国の鎖国と開国との差異は両国のコミュニケーションにも大きな影響を与えて、少なくとも朝鮮が日本によって開国の道を選ぶようになるまでは両国には激しい摩擦があった。もちろん2節で述べられたように中国中心のアジアシステムをどのように認識していたか、という両国のアジア観の差異によって生じた天皇と王という地位名称に関する理念的な葛藤が朝鮮と明治政府との外交的なコミュニケーションを妨害することもあった。しかし、それだけではなく当時の朝鮮が異質の文明ともいえる西洋の挑戦を受けてそれに対抗していくことと、長年続いた勢道政治（後述）による支配層の腐敗と国家紀綱の乱れによって弱まった王朝の権力を強くさせなければならないという内部的な問題との相互作用の中で当時の日本がいかなるものとして写されたか、ということについても考えなければならないだろう。一方では開国を果たして徹底的に伝統を破壊しながら新しい国家を作り出していくが、もう一方では鎖国を徹底的に行いながら弱まった王権の力を取り戻すためにさまざまな改革を実践していく、という対極的な両国の差異は摩擦を起こりうる素材を元々持っていたといわざるをえない。

強力な西洋の力に対抗するために朝鮮の内部では儒教・朱子学的華夷思想にもとづく衛正斥邪的攘夷論＝鎖国論が強くなった。[24] もともと朝鮮王朝の基本理念とは儒教である。それは単なる宗教的なものではなく政治的支配イデオロギーであった。そのイデオロギーを持って西洋に対抗し、西洋を野蛮として決めつけたのである。なぜこんなに西洋に対するイメージが悪くなったかといえば、その背景には2つの側面があるが、ひとつはキリスト教邪教観による民族的生活秩序に対する危機感であり、もうひとつは英仏連合軍の北京侵入事件に至って西洋人の侵略暴虐に関する疑念であった。[25] これらが相互に作用して西洋に対するイメージはますます悪くなっていくのである。キリスト教に対することは後述する。

このようなことは日本が本格的に開国へ向かって突き進んでいくのとは対称的であった。換言すれば、日本も黒船以降強力な攘夷論が登場し、開国を実施しようとした幕府を「王政復古」のもとで倒して、新たな明治政府ー明治維新が成功した後は革命家たちは開国に変わるーが天皇とともに登場するが、それと似たような状況が時

間的に遅れるが朝鮮にも現れるのである。しかし、朝鮮も自らの選択ではないけれど日本によって開国を選ぶようになるのである。

このように朝鮮の末期は外部的に厳しい状況に立たされた。いわゆる外勢によって訪れた朝鮮王朝の国家的危機であった。その国家的危機を乗り越えるために「鎖国政策」を国家イデオロギーをもって強力に推進していた人が大院君であった。大院君は朝鮮の王である高宗の父であった。高宗が幼いとき（十二歳）王になったので父である大院君が摂政を行ったのである。

ところが大院君が政治権力を握ったときには安東金という一族が朝鮮王と外戚関係を作ってその勢いを持って（朝鮮王23代から25代まで）国政を握っていたのである。それがいわゆる勢道政治であった。[26] つまり、「権勢ある一族のものが国政を専断する政治のこと」であるが、それによって王朝の権威は地に落ち、国力も衰退し、国民の生活も苦しい一向であった。そのような中、第25代の哲宗が死んだがその後継者がいなかったため、遠い王族である大院君の次男を王位につかせた。それが高宗である。

高宗が即位すると父である大院君は外国に対して厳しい鎖国政策を採り、内政として改革を断行して大きな不平不満を呼び起こしたが、強力な権力でそのような不平不満を押し切って王権強化のために国家の力を注いでいくのである。

大院君の内政を見ると、まず、それまで権力を握っていた安東金氏の勢力を政府の中心部から追い出して公平に人材を登用し、貴族階級の常民に対する横暴を押さえた。当時朝鮮は両班という少数の貴族が多数の民衆を支配し、自分たちの権力を利用して膨大な経済利益を独占したが、その力を弱めるために彼らの勢力が根を下ろしていた「書院」（両班の私学）を撤廃したのである。そして経済利益の集中を防いだ上で彼らから経済的な利益を取り戻して国家財政を強化した。さらに、彼は王権の権威を示すために豊臣秀吉の朝鮮侵略によって焼失した景福宮の再建に着手し民衆に沢山の税金を課し民衆の不満も高かった。このような政策は政治的な論理に従うものではなく、王の父という地位を利用して独裁的な政策を実施したのである。このように内政的に様々な政策を通して強力な王権を構築しようとしたのである。

対外的には強固な鎖国政策を実施してカトリックへの宗教弾圧を行ってフランス宣教師を3人処刑し、キリスト教が国内に伝播されないように努力したのである。そして彼はフランスとの戦い（丙寅洋擾）とアメリカとの戦い（辛未洋擾）をして両国の侵略を防いだ。もちろんこれは全面的な戦争ではなくあくまでも局地的な衝突ともいえるだろうが、そこで両国の軍隊が被害を残して後退したことで大院君が鎖国政策にさらに自信を持ったことはいうまでもない。

大院君は三箇条を発表する。1つめは、「苦しみを耐えず和親を許すことは売国すること」、2つめは「毒を耐えず交易を許すことは国を滅ぼすこと」、3つめは「賊が京城まで迫ってくるのに京城を去ることは国を危なくすること」、というものであった。[27] しかし、朝鮮の断固たる鎖国政策は大院君によるものであると同時に西洋の無分別な開国の要求、侵略の結果でもあった。2つの戦争もそうで

あったが、それとともに南延君（大院君の父）の墓を盗掘していろんなものを盗んだことが大きな波紋を呼び起こし大院君の鎖国政策に対する確信はさらに強くなったのである。

なぜならば、朝鮮の儒教的な理念から見ると自分の親の墓を盗掘されることは特に両班の立場から見るとひどい親不孝であり、それは許されないことであった。従って、大院君の怒りは想像絶するほどのものであったと理解してもいいだろう。特に祭祀を否定しているキリスト教とそのような不穏な行為とを重ねて見た場合、西洋＝キリスト教＝反儒教としてとられても仕方がないだろう。その後全国各地に「洋夷浸犯、非戦則和、主和売国」を内容とする斥和碑が立てられたのである。

このように朝鮮の末期、特に大院君の執政の10年間の期間は内外的に激動の時期であったし、それを乗り越えるために厳しい鎖国政策と国内政治、経済、社会的な改革を行ったのである。そのことは朝鮮の王権を強くするための一連の政治行為であったのである。これは日本の明治維新の時の状況と対処に似たようなところがあるだろうが、明治維新とは違って革命になれず、ただ王の権力を強化するためのことであった。国家全体の大きな変革はなく、ただ権力者が入れ替わっただけであったのである。これは朝鮮の末期の状況を理解するのに重要なことである。朝鮮の内部でなぜ明治維新のような変革が起こらなかったのだろうか。様々な政変が起こってもそれが革命まで達しないのは朝鮮に政治的な特別性があるからだと考えられる。ここでは論じる余裕はないが研究の価値があると考えられる。

それはともあれ、このような朝鮮の状況のもとでは明治維新を成功させて開国を実施している日本の明治初期の社会、文化的な状況が、朝鮮の目には屈折されて写ったことは言うまでもないだろう。そのような状況について「日省録」に次のように書かれている。

「（前略）予（高宗）曰く、倭人数十余名（燕京）に来在す。年前、服色なお渠国（日本）の制を守るといいしに、今、則ち多く洋夷のように效（なら）うという。洋夷の誘う所のためその本色を変えしや。根弼曰く、果して然り。而して一国を挙げ洋制に従うを欲すという。必ず内乱の生ずるあらん。敬源曰く、倭醜果して洋服を着し、今年春間、洋艦にのり洋醜に随いて東碑楼近地の廃寺に来接す。初め久住の意有り。六月初、その国書を伝えるや忙として即来す。中期の士多く言う、渠国必ず内乱あらんと。宇曰く、所謂倭主は和同し、経伝を毀棄し、専ら邪教を尚（たつと）ぶ。衣服制度に至りては、みな洋夷一様の如し。予曰く、倭国いま関白無ければ洋夷の通倭は、すなわちこれ倭主のなす所なりや。根弼曰く、倭主洋酋を引きれ、その力を藉（か）りて関白を除き、みづから権鋼を総攬すといえども、その実、空山に独座し、引虎、自衛するが如し。敬源曰く、いま洋と和は異なるところなし。」[28]

この文章は、朝鮮が如何に日本の開国に伴う社会文化的な変化に

対して批判的であったかを生々しく伝えてくれるものである。これは西洋から開国を迫られてそれに強固に対抗している朝鮮側の社会的文化的状況と開国を明治政府の基本政策として決めて、西洋の文明を積極的に受け入れ、大きな変化を迎えている日本の社会文化的な状況という両国の齟齬が外交関係を破綻にする理由である、ことを示していると言える。特に、日本を西洋と同視することで西洋を敵に回した朝鮮側は、日本も敵とせざるを得ないだろう。そして朝鮮側は天皇を倭主と呼びながら倭主が西洋の文物を受け入れる張本人であると批判している。ここでも天皇という地位名称は避けているのが目立つのである。

朝鮮側は攘夷から開国へ転換した日本の当時の風習の変化に対して批判しているが、特に宗教政策について批判している。宗教政策は朝鮮側にとって重要な問題であった。

この文章の中に「邪教を尚ぶ」という表現が出てくる。それは日本が邪教であるキリスト教を認めることについての批判である。先述したように、大院君の鎖国政策で一番大事なのは西洋の宗教に対する批判であった。その宗教は朝鮮王朝が成立して権力イデオロギーになった儒教とは違うものであった。特に、キリスト教における「自分以外の神を崇拝してはいけない」という戒律は祖先崇拝（祭祀）を中心とする朝鮮の儒教にとっては国家の根本を揺るがす邪教に間違いないだろう。

朝鮮の儒教において祖先崇拝は基本的には「孝」がその理念の根本をなしている。「孝」とは常に「恩」との相互関係を保っている。すなわち、「恩」とは出生、養育、財産相続を親からもらうことをいうのである。そしてそれに恩返しの形で「孝」が働くのである。「孝」とは子孫の跡継ぎ、親への奉公、祭祀の義務である。この両方の関係が後に政治的、社会的次元で制度化－権利と義務との関係－されてきたのである。[28] 特に、そのような祖先崇拝を元にした「孝」の理念は、朝鮮王朝の統治理念のために政治的なイデオロギー化したのである。

ところが、朝鮮王朝においてなぜ儒教祭祀が重要な政治的イデオロギーになったのであろうか。朝鮮王朝の始祖である李成桂は逆姓革命で高麗を倒して朝鮮という王朝を作り出した。しかしながら正当な純理によって王になったのではなく、クーデタによって王権を奪取したため王権の初期は不安定なものであった。そのため、それを安定化、正当化させるものとして血統主義中心の儒教の祭祀を利用するしかなかったのである。それは自分以外の血統は王になれないという排他的で、王に挑戦する機会を与えないということであった。言い換えれば、「李」という血統を通さないと王になれないと言うことである。

要するに、王朝国家社会では王は「天」を象徴する存在であるが、王が正当な継承によるのではなく武力によって政権を奪取して新たな王朝を建てた場合には社会の基本的な秩序は崩壊の危険にさらされる。だからこそ、血統主義（子孫の後継ぎ）の祖先崇拝儀礼（祭祀）を通じて王権の連続性と正当性が強調されるのである。則ち、血統主義を通じなければ、王権に近付くことができないということ

である。これは儒教の現実主義的な合理主義を利用しているにほかならない。[30]

こうして朝鮮の王朝は身分制度そして官僚制度を施行して、日本の江戸時代の封建制度とは違った制度をもって国家を統治したのである。日本で明治時代に天皇制が神道と共に国家イデオロギーとして定着したのと同様であろう。すなわち、儒教の血統主義の祖先崇拝を通して王統の神格化を創り出し、両班制という身分制度と官僚制度を創って全国を支配したのである。

朝鮮の根本的な理念からすれば、たしかに日本は理解しがたいように見えるのは当然であろう。しかしながら、これは朝鮮の理念がもたらす攘夷の意味が日本とは違うということに起因する。朝鮮においては、攘夷は国家というよりは宗教的理念に基づいている。先述したように、王朝を維持する手段は儒教という祖先崇拝であるが、キリスト教はその祖先崇拝を否定するから、もし、その宗教が広がれば、それは王朝の基盤を揺るがすことになる。強力な政治権力の規範である儒教がキリスト教によって否定されると、結局それは王朝の否定につながるだろう。だからこそ、攘夷の始まりはキリスト教からであったわけである。

そして大院君が政権を握ると最も強力に攘夷を推進する。しかし強い力を持って迫ってくる西洋から自分を守るためには、建国から「文」を中心としてきたが、その理念を捨てて「武」を強くさせなければならなかったのである。だから、彼は国防を強化し、シャーマン号事件でアメリカと戦って勝利する。更に、フランスに対しても勝利を納める。この二つの西洋との戦いでの勝利は朝鮮の官僚制度を基盤とする「文官」中心の政治勢力が弱くなり、それに替ってだんだん「武官」の力が強くなり始めたことを示している。朝鮮の攘夷は単なる伝統主義の連続性ではなく、新しい政治体制の台頭である。実際に、日本との国交樹立の際に問題になった「皇」については日本側の削除によって一段落ついたが、朝鮮側が再び国交樹立を拒否する文書で次のような内容が書かれている。

「（前略）就（ついては）夫国情ヲ吐露致候段、耻入（はじいり）候ヘトモ我国ニモ仏国戦争以来、武臣権ヲ専ラニシ、武官未曾有ノ兼官等モ始り、文官ノ面々失望逡巡ノ外無之、元来武官の儀、一時ノ血気ニ任セ果断ノ雄論多ク候ヘトモ、国家ノ長計ニ於テ如何何有之（いかがこれあるべき）ヵ、是迄日本ニ交通ハ全ク文官ノ取扱ニ候処、当節ヨリハ武官ノ建議不少（すくなからず）、依（これにより）之只今一己無理ノ取計ヲ以て、書契俸出ノ時ハ即時厳科ニ処セラレ候ハ眠前ニ有之（これあり）、（後略）」[31]

国家が危機に頻すると武官の力が強まり、文官が無視されるという話しはダレの「朝鮮事情」から察することができる。長い間、中国との関係の中で自分を位置付け、儒教を通じて自己を再確認し、再構築してきたが、今度は全く違う他者に出会ったということと関係があるだろう。さらに、武はこれまで中国が肩代りしてくれたが、

中国が阿片戦争に負けたことで、それも期待できなくなった。そのような中で朝鮮は西洋列強の開国要求という脅威にさらされたのだ。これらの国際的な変化によって朝鮮の武に対する認識が変わったのだろう。大院君の政策はそれに火を付けたのだと言える。

このように朝鮮の末期は日本と同様に世界の変革を乗り越えるためにもがいていたのである。それは朝鮮王朝の権力を強くすることである。それによって朝鮮の内部は大きな変化を強いられるのであるが、その中でも強固な鎖国政策を行い、「文」よりは「武」を強調することになるのである。これは一見明治維新と似ているところがあるかもしれないが、朝鮮は権力側の変化が無く、むしろそれを強化するためのことであるから同じだとは言えないだろう。つまり、お互いに変化を求めていくのであるが、目標は違うのである。この違った目標によって両者はお互いに違った形で写されるし、それによって激しい摩擦が繰り広げられると言わざるをえない。

このような積極的な攘夷の実践や武の登場は、明治維新によって変わりつつあった日本が、朝鮮を認識する際にも影響を及ぼしたと考えられる。朝鮮はただ伝統主義に閉じ込もるのではなく、急変する国際情勢に対処するために、一方では様々な変革を行いながら、もう一方では伝統を堅く守ることをさらに行っていくのである。しかし、変革と伝統は別のものではなく、王権の強化という枠組みのなかで行われるのである。このような朝鮮の姿は日本には分裂的に映ったと思われる。だが、日本にとって自分自身の姿が映し出されているようにも思えたであろう。

4. 結び

以上のように、文化コミュニケーションの観点から日本と朝鮮との摩擦を考える時、両国の摩擦は政治的というよりは文化的、社会的なコンテクストの摩擦として捉えることができる。それを象徴的に表すものとして、日本の「天皇」と朝鮮の「王」との対立を取り上げることができる。それは中国中心のアジアヒエラルキーシステムを両国はどのように認識しているか、という当時のアジア観のずれであった。また、朝鮮の新たな政治権力の登場によって社会、文化的変動、そして「王権強化」のために実施された「鎖国政策」－西洋（キリスト教）に対抗することーが登場するが、その朝鮮の鎖国政策と明治政府の開国政策との食い違いー朝鮮の王にとって天皇は西洋の味方として写されることによって鎖国の対象になってしまうことーが相互に働きながら両国の摩擦に火をつけたのである。そしてさらに悲劇的なのは両国は自己中心の世界から抜け出せなかったし、抜け出そうともしなかったことである。常に、自分の世界だけを主張するばかりであったのである。しかし、それはある意味では当然であったかもしれない。なぜかというと、両国はお互いに相手に対して無知であったからであろう。これは近世における曖昧な外交関係の痕跡であろう。

このように日本も朝鮮も方向は違うがお互いに変化しつつあったのである。にもかかわらず、朝鮮は伝統主義に留まっており、それ

に対して日本は西洋化に向けて革新されつつあるという固定した図式でとらえようとすると、「征韓」は一方の他方による「侵略」という意味しか持たなくなる。それよりも両国がお互いに変化していると認識するならば「征韓」のきっかけになった両国の外交摩擦は単なる政治・経済的な対立から解放され、重層的な意味をもつ文化摩擦として理解されうるだろう。

注

(1) 青木　保、『文化の否定性』、中央公論社、昭和六三年、三九頁

(2) 同書、三九頁

(3) 「皇祚聯綿」、「皇上登極」、「皇上之誠意也」外務省調査部　編纂、『大日本外交文書』第1巻　第2冊、日本国際協会、昭和一一年、六九二－六九三

(4) 姜在彦、「江華島事件前後－日本による『征韓外交』の始末－」、『季刊　三千里』3号、一九七五年、三千里社、四九－五一頁

(5) 姜範錫、『征韓論政変－明治六年の権力闘争』、一九九〇年、サイマル出版会、五七－六八頁

(6) 毛利敏彦、『明治維新の再発見』、一九九三年、吉川弘文館、一〇七－一二二頁

(7) 「朝鮮は中国との形式的な事大外交をつうじて、実質的には経済的および文化的な利益をえており、また中国との事大外交が、その他の国との関係において外交的および軍事的に朝鮮側に有利に利用されるばあいがあった」「近代初期の日本と朝鮮－教科書のなかの朝鮮　四」、『季刊　三千里』№11、三千里社、一九七七年、二三四頁
このような意識は当時の朝鮮の政治エリート達の間では当然だという雰囲気が強かったらしい。朝鮮の実学者として有名な丁若も日本が朝鮮を侵略するかに関する論説の中で彼は日本の侵略に関しては心配する必要がないと主張している。その根拠として「清はわが国（朝鮮）を自分の左手として認めているし、朝鮮と国境がくっついているから清は断固戦争に慣れていた夷（日本）が自分の左手を占領することを許さないし、日本も朝鮮を所有することができないとはっきり認識しているから心配しなくてもいい」と述べている。丁若鏞（朴錫武、丁海廉　編訳）、『茶山論説選集』、現代実学社、一九九六年、九三頁

(8) 「中国の道（孔孟の道）亡べば、即ち夷狄、禽獣至る。北虜（清）の夷狄は、なお語るに足るが、西洋の禽獣は語るに足らない」というように清に対するイメージは常に明とは違っていたのである。姜在彦、「朝鮮の儒教・日本の儒教」、『季刊　三千里』№19、三千里社、一九七九年、三五頁
原文は李恒老の『華西集』巻十二、「洋禍」に収められている。

(9) 新井白石（今泉定介　編・校訂）、『新井白石』第三巻、東京活版株式会社、明治三九年、六三四頁

(10) 徳川将軍の「大君外交体制」には外交における下記のような姿勢がうかがえる。それについて荒野は2つの側面から分析している。ひとつは、徳川将軍が、自らの国際的呼称を、「日本国王」号を廃して「日本国大君」としたことでこれには自分を中心として作り上げた国際秩序の中で自らを日本国の統治権と外交権の掌握者として位置付けようとする意味が含まれている。二つめのは、国際秩序の中に自分をどのように位置付けて自分の外交意図を貫徹させるかという点である。荒野泰典、『近世日本と東アジア』、東京大学出版会、一九八八年、一六二－六三頁

(11) 新井白石（今泉定介　編・校訂）、上掲書、六三四－六三五頁

(12) 申維翰（姜在彦　訳）、『海游録』、平凡社、一九九二年、一四三－一四四

(13) 崔吉城、「日本天皇制と近代化の研究」、『日本学誌』第11輯、啓明大学校日本文化研究所、一九九〇年、四三－四四頁

(14) 仲尾　宏、『朝鮮通信使と江戸時代の三都』、明石書店、一九九三年、一六二頁. 原文は『海槎録』「与許書状論礼書」に収められている。

(15) 最近の韓国の新聞では「天皇」の変わりに「王」という名称を使っているが、崔吉城はこれに対して「韓国の王政と日本の天皇は歴史的に、本質的に差異があり、日本の特有の制度と背景を持った日本の天皇は天皇として呼ばれることは当然であり、学術用語、外来語としてすでに使われてきたからそのまま使用することが妥当である」と批判と提案をしているのである。彼はある意味では日韓王権構造の差異を認識して必ずしも天皇が優越的な存在ではないから文化相対的な立場から日本の王権構造を無視してはいけないと強調している。崔吉城、上掲書、四三頁

(16) 荒木昌保　編集（土屋蕎雄　監修）、『新聞が語る明治史－明治元年～明治二五年』、明光社、昭和五一年、四三頁. 明治元年一二・－東京城日誌八にはイタリアの特権全権公使が日本の天皇に国書を奉呈することについて伝えている。

(17) 外務省調査部　編纂、『大日本外交文書』第3巻、日本国際協会、昭和一三年、一四五頁

(18) 李炫熙、『征韓論の背景と影響』、大旺社、一九九四年、一六四頁. 原文は承政院日記、高宗九年四月四日に収められている。

(19) 三条は対朝鮮交渉において朝鮮と清との関係についてとるべき態度について指示をしているがその文書の中で「彼国若シ自ら清国ノ属藩ト称シテ、事物悉ク清ニ仰クノ旨ヲ主張セハ是亦其趣ヲ上申シ指令ヲ待ツヘキ事」という文がある。外務省調査部　編纂、『大日本外交文書』第8巻、日本国際協会、昭和一五年、五三頁

(20) 徳川将軍と朝鮮王が同等な関係あったから朝鮮国王も日本天皇に臣服すべきであるが朝鮮は本当の権力は幕府にあると思って幕府と交際していたので天皇に対する新たな格式を朝鮮は認めることがないと報告している。外務省調査部編纂、上掲書、八六〇－八六一頁. を参照せよ。

(21) 青木　保、上掲書、三八頁. 青木は現代における日本のアメリカに対する異文化観の態度を「自文化中心主義」的相対主義と呼んでいる。

(22) 張竜傑、「『征韓論』の文化人類学的解釈－社会・文化的背景を中心として－」、『年報　人間科学』第16号、一九九五年、一四九－一五一頁

(23) このような朝鮮をマッケンジーは「隠者の王国」と名付け、鎖国状況を次のように述べている。

「今日『コリア』（Korea）として知られているこの国Chosenは、外の世界とはまったく交渉をもたない閉じられた国であった。北の辺境地帯は、数世紀にわたって一種の無法地帯をなしており、そこでは山賊どもが気ままに勝手にふるまいはびこっており、普通の旅行者はそこを通ることさえできなかった。緑江を渡って来る中国人とても、朝鮮の側に入れば、手きびしく容赦ない両班Yan-banの手によって、すぐさま首をはねられるのがおちであった。ほとんどすべての外国船船は、この国の長大で岩礁の多い禁しられた沿岸を、注意深く避けて通った。今も昔も、この国を探検しようとする航海者が沿岸の一隅をでも訪問しようとするなら、ただちにはげしい反撃に出会うだけであった。」F・A・マッケンジー（渡辺　学　訳注）、『朝鮮の悲劇』、平凡社、一九九三年、

四頁

(24) 金栄作、『韓末ナショナリズムの研究』、東京大学出版会、一九七五年、一〇頁

(25) 同書、一四－一九頁

(26) 姜在彦、『朝鮮近代史』、平凡社、一九八六年、一四頁

(27) 金栄作、上掲書、二一頁. 原文は「不耐其苦、若許和親、則是売国也。賊迫京城、若有去、則是危国也。不耐其苦、若許和親、則是売国也。」である。『高宗実録』巻三、丙寅　三年九月条

(28) 姜範錫、上掲書、六五頁. 原文は『日省録』、高宗一〇年癸酉八月一三日に収められている。

(29) 崔吉城、『韓国祖先崇拝』、図書出版イェゾン社、一九八六年、五三－六一頁

(30) 崔吉城、『韓国民間信仰の研究』、啓明大学出版部、一九八九年、二三三－二四〇頁

(31) 外務省調査部　編纂、上掲書、昭和一三年、二三三頁

Friction in Japanese-korean Diplomatic Relations Examined from the Point of View of Cultural Communication —Focussing on Seikan and cultural friction—

JANG Yong Geoll

Historians have explained the friction in Japanese-Korean relations that began in the first year of the Meiji era (1868) as a political-ideological disagreement over interpretation of the terms "Emperor" (koh) and "King" (oh); as Japan's exorbitant ambitions for conquest; and as a deception on the part of the political and economic analyses should be acknowledged, when one begins to consider the problem from the point of view of cultural communication it becomes clear that the friction between the two countries cannot be explained according to mere political and economic theories. Instead one can understand this diplomatic friction as friction between cultural and social contexts as seen in the areas of "cultural negativity", self-centered understanding of the other, differences in understanding of the Asian system of hierarchy, differences in views of the West and differences in attitude towards own culture and reforms.

Key words

Seikan, Cultural communication, Cultural friction, Asian system of hierarchy, Closed country and open country (askoku to kaikoku)